



# ふるさとの 60年

インタビュー  
小中学生の作文より



## 「夢のある教育」で一人ひとりの個性を伸ばす。

北茨城市教育委員会  
教育長 松崎 三郎さん

東日本大震災が発生したのは、ちょうど小学生の下校時間でした。海岸地区の子どもたちもいるのですが、校庭でとどまってもらい、一人も事故に遭わずに済みました。津波が来たのが下校後でなかったことが、本当に幸いだったと思います。

北茨城市は昭和40年前半に炭鉱が閉山になり、1,000人規模だった学校がいきなり200人ほどに減少しました。北茨城の市民は自分たちの暮らす地域に愛着があり「おらが学校」という意識が強く、児童・生徒数が少ないなりに地域に密着して学校を維持してきました。

現在は急激な少子化が問題になり、市最北の富士ヶ丘小学校は全校の児童数が17名となっています。市教育委員会では学校統廃合を担当する組織を作り、学校再編について各地区に説明に歩いています。そ

の中で市民から要望があったのは、「統合だけでなく夢のある教育をしてほしい」ということでした。夢のある教育を実現するために、望ましい学校のあり方を検討し、平成28年度に関本第一小学校、富士ヶ丘小学校、関本中学校を集約し、茨城県で3校目となる、施設一体型の中一貫校を設置することになりました。

また平成22年度に、北茨城のこれからの10年計画を策定し、中学校を現在の5校から4校に、小学校を12校から9校にすることを検討し、中郷・磯原・大津・関本・華川の5地区で説明会を行いました。地域住民にとって、学校が消えるということは文化が消えることであり、学校は地域のよりどころになってきたことを改めて実感いたしました。

北茨城市の学校教育が目指すのは、日本だけでなく世界を見据え国際社会で生きられる人づくり、社会で自立できる児童・生徒の育成です。未来を担う一人ひとりの児童・生徒の個性に対応した教育を実践しています。

特色ある取り組みとしては、毎年11月に子ども議会を開催しています。これは模擬会議ではなく本会議で、中学生が議長・副議長を務め、小学校5年生から中学2年生までが議員として質問を行い、市長も出席します。議題に関して市の各課で答弁書を作成し、通学路の街灯設置や、自転車置き場の整備など、実現できるものは実現させてきました。

市制施行60周年を迎え、「子どもは日本、北茨城を担うのだから、大事にしないでならない」という豊田市長の思いを施策に反映させ、さらなる10年を目指して職員一丸となって教育の充実に取り組んでいきます。

### プロフィール：

昭和28年生まれ。昭和51年平潟小学校に教員として新規採用され、小学校長、市教育委員会学校教育課長を経て、平成21年55歳の時に当時県内で最年少の教育長に就任し、現在で7年目。

## 商工業者が手を取り合いまちを元気に。

北茨城市商工会  
会長 大森 廣幸さん

国内有数の石炭産出地であった常磐炭田。福島県富岡町から日立市北部までの太平洋沿岸に多くの炭鉱が点在し、北茨城市も炭鉱のまちとして繁華街に多くの店や施設が充実して栄えました。しかし昭和30年代に入り、日本のエネルギー需要は石炭から石油へと転換します。各地で鉱山の閉山が相次ぎ、北茨城市の基幹産業だった炭鉱の灯が消えたことは、まちの商工業に大きく影響しました。

その間、工業団地や住宅団地が造成され、深刻だった人口減少に歯止めがかかります。しかし、生活スタイルの変化やモータリゼーションの進展を背景に、人々が消費する場所は、まちの商店街から郊外型の大型ショッピングセンターへと移っていきました。最盛期は市内に7つあった商店街は、今では3つに減っています。

高齢化や人口減少に直面しているのは、北茨城市だけではないでしょう。商工会としても、魅力あるまちづくりを目指して、空き店舗対策や地域振興券の活用、商店街の活性化など、地域の方たちのお力を借りながら、様々な対策を講じてきました。

一方では、中心市街地の空洞化によって、交通手段のない高齢者は日々の生活に困っています。そのため4年前から、市の協力を得て、移動販売をする「行商サービス」を始めました。現在でも週3日、市内各地を野菜や果物、魚などの食料品や日用品をトラックに積んで巡回しており、高齢者が外出する機会を設けることで安否確認を兼ねています。

ふるさととは人間の原点だと思っています。生まれ育った場所が魅力的であれば、若者のUターン促進や後継者の育成にもつながるはずです。若者たちの受け皿となる働く場の確保も、今後の課題となってきます。

誰もが安心して暮らせる元気な北茨城市を目指して、行政があらゆる分野で環境整備を進めています。商工会でも、まちの特徴である漁業の6次産業化をはじめ、地域資源を活用した特産品作りや観光開発を目的としたまちおこしなど、地域の方たちと手を取り合って前に進んでいくしかありません。すぐに思った通りの結果につながらなくても、知恵を出し合い、提案し続けていくことが大切だと考えています。



### プロフィール：

有限会社ダイトク代表取締役。平成24年6月1日から現職。



## 歴史を受け継ぎ 地域の発展と 安全を祈願。

大津港唐帰山鎮座 佐波波地祇神社  
宮司 伊藤 禎朗さん

佐波波地祇神社は、今から1200年ほど前の平安時代に創建されたといわれています。昨年、先代の父が他界し、その由緒ある神社の宮司という務めを受け継ぐことになりました。日々重責を感じながらも父の姿を思い浮かべ、少しでも尊敬する父に近づける宮司でありたいと、引き締まる思いで務めています。

ここは眼下に太平洋の大海原が見える絶景を有する場所で、近くの大津港は江戸時代より平潟港と並び水戸藩有数の港として栄えてきました。今日に至るまで漁業を中心に発展してきた地域ですから、この神社は漁師たちの生活の中で重要な役割を果たしてきたといえます。大自然と向き合い命を懸けて働く漁師たち、そしてその家族にとって心の支えになってきたに違いありません。こうした背景から、この神社では5年に一度、5月に常陸大津の御船祭が盛大に行われ、海上安全、大漁祈願の海の行事と、氏子の家内安全を祈願する行事として親しまれてきました。御輿を乗せた神船が大勢の曳き手によって町中を練り歩くという、見ごたえのある勇壮な祭りです。江戸初期に現在の形となったとされますが、過去には資金難や戦禍などの様々な理由で途絶えた時期もあったと聞きます。平成23年の東日本大震災でも大きな被害を受け、御船祭も危ぶまれましたが、苦難を乗り越え、平成26年に予定通り行うことができたことは、氏子皆様のお力添えのお陰だと、父も感謝しておりました。

震災時、高台にある当神社には、難を逃れたり、海の様子を見に来たりする人の姿がありました。近くの小学校が避難所でしたので、一時的でしたがここに集まった人たちが励まし合いながら、不安な日々を過ごしたことが思い出されます。ここは高台のため津波の難は逃れたものの、鳥居、神輿殿、狛犬、燈籠、石碑など多くものが損傷を受けました。現在は本殿装飾、拝殿内の一部を除き、大部分が修復に至りましたが、皆様が安心してご参拝いただけるよう残りの部分の修復についても迅速に進めている次第です。

小中学校の教師だった父は、神事に関する深い知識に精通していました。厳しい一面もありましたが、地域の方々から親しまれ、頼られる存在でした。私もさらに勉強を重ね、歴史ある神社の名に恥じない宮司として精進し、成長していきたいと思えます。そして、地域の皆様の心のよりどころとなる神社の伝統を守り、地域の発展と安全を祈願し続けてまいります。

### プロフィール：

昭和45年生まれ。国学院大学卒業後、笠間稲荷神社に奉職。平成18年佐波波地祇神社に戻り、同27年宮司に就く。

## 伝統ある御船祭を 後世に継承していきたい。

常陸大津の御船祭保存会  
会長 山形 義勝さん

大津町に鎮座する佐波波地祇神社の例大祭として、5年に一度開催される御船祭は、大漁と海上安全を祈るお祭りで国選択無形民俗文化財です。神船は長さ15メートル、幅4メートル、高さ3メートル、総トン数5トンの船に屋形を組み、神輿を乗せ、宮司、渡御歌を奏上する歌子や囃子方が約60人乗り込みます。神船には長さ200メートルの綱を結び、船底に「そろばん」と呼ばれる井桁状に組んだ木枠を進行方向に敷きながら、約300人の引き手と約50人の船を揺らすゆすり手の動きが一体となり陸上渡御する勇壮な祭りで、御船祭保存会が継承しています。

その御船祭保存会の当時の会長が、東日本大震災から半年後に亡くなりました。平成26年の5月には例大祭があるので次の会長を決めなくてはならず、私の元に当時、浜の復興に尽力されていた保存会名誉会長の豊田市長や漁協の鈴木組合長がいらして会長職を頼まれたのです。私は町内の総代でしたが、震災時まで現役で船に乗っていたので、御船祭には参加しても祭りの世話人をやったこともありませんでしたが、町のためになればという思いで引き受けました。

御船祭の船は北茨城市漁業歴史資料館「よう・そろー」に展示保管してあったのですが、震災の津波の被害で船が傷んでいたのです。さらに船だけではなく、お祭りの備品の提灯や旗、船を引くロープもそろばんも大半は津波で流され、残ったものは使い物にならない状態でした。最も頭を痛めたのは、船を修理する船大工が地元になかったことです。気仙沼や八戸まで船大工を探して知り合いの造船所を当たり、いわき市の江名でやっと見つけて船を修理してもらいました。事務局や世話人の方々に大変助けていただき、祭りを復活させることができたのです。

盆と正月に帰らない若者たちも、御船祭には帰ってきます。担ぎ手募集にも多くの方が集まり、地元の人々にとって非常に愛着のある祭りなのです。まちの人が楽しみにしている祭りを継承するためには、次の祭りまでの5年間の維持、体制づくりが重要だと考えています。市制施行60周年を契機に、さらに御船祭の伝統を守っていくために若い人に、どんどん世話人になってもらいたいです。平成31年の本祭に向けて、次の世代に引き継いでいきたいと思っています。



### プロフィール：

昭和23年生まれ。平成23年5月、常陸大津の御船祭保存会会長に就任。家業は巻き網漁で3代目。丸成漁業代表、第十一海栄丸船主。



## 新たなスタートを切り、 基幹産業として一層前進。

大津漁業協同組合

代表理事組合長 鈴木 将之さん

大津の漁業の特徴は、沖合で船団で行うイワシやサバなどの巻き網漁、小型船のヒラメやアンコウなどの底引き漁、沿岸の引き網漁によるシラス漁が行われていることです。昭和の時代には、巻き網漁でイワシが1日2,000トン水揚げされましたが、平成になってからは資源を守るために漁の時間や量を規制していますから1日350トンほどの水揚げです。日本ほど、資源を保存・管理しながら漁をしている国はないのです。

震災前までの漁港に整備するのに50年かかりました。10次まで5年ごとの整備計画によって完成した港が、東日本大震災の津波で一瞬にして全て流されたのです。津波は地震発生から30分で大津漁港に到達し、最大6メートルの高さまで来ましたが、それまでも何度か津波は来ましたが、今回の津波は比べようもないものでした。大津漁港は沖の堤防があり、二重堤防で静穏度はトップレベルなのですが、1トン船はほとんど流されてしまいました。

地震が発生したのは、ちょうど競りの時間で、市場で多くの人が働いており、「津波が来るから逃げろ」と指示を出し避難させました。津波は30分ごとに押し寄せ、3波まで大きな津波でしたが、その第1波で漁協は水没しました。私は震災直後から、水戸や東京の関係機関に市長と共に出向くなど今後の対応に奔走しました。東日本大震災での茨城県の港湾被害は210億円に上りましたが、そのうちの110億円は北茨城なのです。未曾有の災害であったにもかかわらず、北茨城は忘れられた被災地のようでした。

やりきれない思いでいた震災から1カ月後に、天皇皇后両陛下が北茨城をご訪問くださいました。長さ150メートルにわたり決壊した防波堤や打ち上げられた漁船など、被災状況を説明させていただき、両陛下は、流された行方不明者がいると聞くと、沖合に向かって黙礼されました。大変感動したできごとで、復興の大きな励みになりました。

現在も福島県での漁は規制されており、小型船漁は復活できないでいます。しかし、組合員は震災後3年間で5隻の大型巻き網船を新造し、大型運搬船との船団で盛んに漁を行っています。津波に流された市場と製氷工場も、復興事業として市の補助金で建設され、岸壁は県と国の事業により整備されました。大津漁協も新たなスタートを切れましたので、市制施行60周年を迎え、市の基幹産業として一層頑張って前進していきます。

### プロフィール：

昭和18年生まれ。大津漁業協同組合長に就任して4期12年目。昭和52年まで船に乗っていたが退任し、現在は息子が社長兼漁労長として大型巻き網船第六福栄丸を操業。

## 地域の農業を守り、 安心して暮らせる社会を。

北茨城市農業委員会

会長 木村 早苗さん

北茨城市は海と山に包まれ、四季折々の自然が美しいところです。その豊かな大地を生かし、漁業と並んで農業も発展してきました。広大な土地に米や野菜を生産する専業農家もいれば、サラリーマンの兼業農家も少なくありません。

私は大学卒業後、種苗メーカーの会社に就職し、その後25歳の時に実家に戻り、現在に至るまで40年間農業に携わっています。当初はそれまで学んできたことを生かし、この地域ではあまり開拓されていなかった花業を始めることにしました。父は米や野菜を作っていましたが、一本に絞るよりも様々な分野の農作物を生産する方が将来的に安定していると考えたからでした。ビニールハウスの設置など設備投資を図り、事業を軌道に乗せることに努めました。時代と共に栽培する花の種類は変わってきていますが、生産コストなどを考慮し、今は年間30種類ほどを出荷しています。そのほかに、先代から受け継いでいる水田の生産にも力を入れています。恵まれた土壌で栽培する米はおいしく、その評判を聞いて直接買いに来て下さるお客様も少しずつ増えているのはありがたいことです。

5年ほど前から北茨城市農業委員会の会長を務めさせていただいています。大切な責任を担い、業務に追われる日々を過ごしていますが、振り返ると平成23年の東日本大震災は大きな試練だったと感じています。市内の関連施設の被害は少なかったものの、水田が液状化し、どこから手をつけていいかわからない状況でした。市の行政の的確で迅速な対応がなかったら大変な事態になっていたと思いますが、市の援助により早い復旧を進めることができ、本当に助けられました。大きな痛手は風評被害でした。こういう時こそ生産者同志、力を合わせて頑張ろうと励まし合い、辛い状況をなんとか乗り越えることができたと思います。

後継者や雇用の問題、T P Pへの対応など、今後の課題に取り組みつつ、流通の拡大を図ること、稲W C Sや飼料米の水田有効利用など、安定した基盤を構築することも選択肢の一つとして考えていかなければなりません。地域の農業を守ることは、安心して暮らせる社会をつくることにつながります。先祖から受け継いだ貴重な財産である恵まれた大地をどう生かすかは、私たちに託された務めです。そのことと真摯に向き合い、将来の明るい展望を見つめて農業の発展に尽力していきたいと思っています。



### プロフィール：

昭和25年生まれ。サカタ種苗(株)勤務を経て、実家の農業に従事。平成23年北茨城市農業委員会会長に就任。



## 温かい人柄は、 どこにも負けない観光資源。

五浦観光ホテル

女将 村田 和華子さん

当館は1936年に創業し、今年80周年を迎えます。周辺の炭鉱産業が全盛期を迎えた戦後は、企業のご接待で利用されることが多かったそうです。その後、高度経済成長の波に乗って観光やレジャー産業が注目されるようになり、団体旅行が各地で盛んになるのを受けて1957年、別館「大観荘」をオープンしました。

北茨城の中でも、五浦は岡倉天心が居を構え、日本美術院を移転させたことに象徴されるよう、近代美術の黎明の地として芸術的、文化的な価値を発信し続けてきました。この地にある旅館としても、たくさんの方々にそれを伝えていく使命があると自負しています。

嫁いでからずっと、地元の方たちの気持ちの温かさに感謝してきました。東日本大震災を機に、その思いをさらに強くしました。津波や地震で誰もが被害を受けたにもかかわらず、すぐに避難所へボランティア活動に集まってきたのです。市民の方々の結束の強さ、面倒見の良さに胸が熱くなり、私たちも社員一同頑張ろうという気持ちで共に炊き出しをしました。この体験が震災後の営業再開へ向かう原動力となり、励みとなりました。

北茨城には風光明媚な景色、天心や横山大観、野口雨情に代表される質の高い芸術文化、太平洋からの恵みなど多くの観光資源がありますが、ここに暮らす人たちの温かな人柄もまた、どこにも負けない観光資源だと強く感じています。

お客様との出会いは財産です。創業した祖父の代から4世代でご利用下さる常連様もいらっしゃいます。当館がお客様にとって集い、絆を深める場、思い出の地となることは、言葉に尽くせないほど有り難いです。人生の節目節目にお越しいただきますと、お客様の家族の歴史に寄り添っているようでとても嬉しく、と同時に身の引き締まる思いがします。

和食がユネスコ無形文化遺産に登録されましたが、食をはじめ装い、年中行事など、日本の暮らしには四季が根付いています。旅館でのおもてなしには日本文化が凝縮されており、茶道や華道の知識も含めて、お客様の期待を裏切ることがないよう努めています。時に海外からのゲストもお越しになります。この地の強みを生かし、日本ならではの宿、北茨城でしか体験し得ない旅を提供し、旅館の魅力を感じていただけたらと思います。これから先もずっと、一人ひとりの思い出の中に、美しい五浦の景色が刻まれていくことを願っています。

### プロフィール：

大子町生まれ。日本航空、国際線乗務後、1991年結婚を機に同ホテル若女将に。海外からの観光客に対しても、北茨城市の魅力伝えている。

## 芸術文化の土壌が 北茨城の大きな財産です。

北茨城市文化協会

会長 池田 勝雄さん

北茨城市文化協会は、美文（美術・文芸）・芸能活動を行っている市内26団体により、昭和54年に発足しました。当初は美文は書道、工芸、陶芸、詩、俳句、短歌などで、芸能は民謡、能、民舞などの団体でした。それまで各団体が単独で行っていた展覧会や発表会を、協会主催で開催するようになり、現在は茨城県天心記念五浦美術館で市美術文芸展覧会、市民ふれあいセンターで市芸能発表会や磯原節大会などを開催しています。

北茨城市は、野口雨情、岡倉天心、横山大観、菱田春草、飛田周山などにゆかりのある地で、芸術文化の土壌があり、それが市の大きな財産です。芸術文化に関心を持つ市民も多く、市でも芸術文化活動の支援に積極的に取り組み、昭和60年から市の無料バスで東京等で一流の芸術を観賞する「芸術鑑賞号」がスタートしました。日展などの美術展や劇団四季や宝塚歌劇団のミュージカル、盆栽展など、市民の要望を聞きながら実施してきました。定員は40名でチケット代のみ参加者負担の芸術鑑賞号は毎回好評で、年6回開催していました。5年前からは都内などに出かけるのは年2回で、年1回は落語家に来ていただいてふれあいセンターで寄席を開催し、さらに多くの市民に芸術文化に親しんでもらえるようになりました。また、野口雨情のお孫さんで、野口雨情生家・資料館長である野口不二子さんも、童謡や本に親しむ活動に取り組まれています。さらに市には磯原雨情会があり、子どもたちも詩を作ったり、雨情の童謡を歌う活動をしています。

北茨城の文化を育てようと、市では野口雨情関係、芸術、芸能に力を注いでいます。北茨城市文化協会は市民の創作活動を盛り上げるのが役目ですが、会員が年々高齢化してきています。市制施行60周年を迎え、今後は小学生から20歳前後の若い世代、そして芸術文化が生涯の生きがいづくりにつながる40代、50代の方に活動に参加してもらえる組織づくりをしていきたいと考えています。そのためには拠点づくりが必要なので、統廃合により空き教室になった学校を活用していくことを検討しています。そこに行けば、いつでも誰でも活動できるという場をつくりたいのです。さらに、良い作品を見ることも大切ですから、芸術鑑賞で本物を見て目の肥やしにすることも継続させたいです。また、五浦美術館や雨情記念館をもっと活用し、芸術文化を市民に身近なものにしていきたいと思っています。



### プロフィール：

昭和18年生まれ。昭和42年、中学校教員として北茨城市に赴任。平成16年同市立明德小学校校長で退職。平成27年4月に北茨城市文化協会会長に就任。

## 地域の防災力を高め、安全・安心につなげたい。

北茨城市消防団  
団長 飛田 和義さん

北茨城市消防団は各地区にある19分団と女性分団の計20分団で活動しています。各分団で日頃から、消防ポンプ自動車などの装備の点検と整備、訓練活動などを継続的に行い、災害時に備えてきました。そうした中でも、東日本大震災による津波は私たちの想像をはるかに上回り、沿岸部を中心に甚大な被害をもたらしたのです。

消防団では地震発生を受けて、ただちに管轄する地域の警戒と津波の広報に当たりました。私たち幹部は消防本部にかけつけ、無線を通じて各分団車両に指示を出しました。団員は消防ポンプ自動車で各地区をくまなく走り、消防ポンプ自動車に搭載されている拡声器で、津波警報を広報して避難を呼びかけると共に、逃げ遅れた住民はいないか、救助の必要はないか確認して回りました。

津波が引いた後は、取り残された住民を高台にある避難所まで誘導したり、負傷者を救護したり、避難所では発電機による電源を確保するなど、次々に対応。さらに、山積みになったがれきの撤去作業では、被害の少ない山間部の分団の協力を得ながら皆が結束して作業を進めました。

震災を機に防災無線が市内全域に設置され、消防本部の庁舎も高台に移転することになりました。市の防災対策が充実すると並行して、行政に頼るばかりでなく、個人々の防災意識も高まってきたようです。各地域で自主防災会を立ち上げる動きが盛り上がり、「地域コミュニティは自分たちで守る」といった考え方が広がってきていると感じます。

私たち消防団でも、震災をきっかけに、防災活動がいかに幅広いものであるか、そして地域住民との日常からの密着した関係性が重要であるかを実感しました。市内には現在、約470人の団員がおります。団員が高齢化したり、人口減少で若い団員の確保が難しくなるなど、これからの課題は残っています。

震災時における団員の積極的な活動は、多くの住民に深く浸透したのではないのでしょうか。災害を教訓に地域防災力を高め、将来に引き継いでいくためにも、消防団が住民と密にコミュニケーションを取りながら、まち全体の防災意識の醸成に貢献していけたらと思います。



### プロフィール：

昭和22年生まれ。昭和46年、市消防団第4分団員に任命され、平成20年4月から現職。長年にわたる消防団活動への貢献に対し、同22年に藍綬褒章、同24年に県知事から永年勤続40年の表彰を受ける。

## 炭鉱と共に歩み、閉山を見届ける。

元常磐炭鉱茨城鉱業所神ノ山坑労務係長  
佐藤 宗夫さん

高校時代から将来の職業として、法律を基点とした労務管理という明確な目標がありました。その目標に沿って大学を選び、卒業後は父が常磐炭鉱に勤務していた関係もあり、迷うことなく常磐炭鉱に入社しました。

入社後は、文系であっても坑内で石炭を採掘する現場を知らなければ企業の真髄は分からない、という考え方から6カ月の現場実習を体験します。地上では考えられない暑熱で、特に常磐炭業所の坑内は、5分労働して5分水風呂につかる過酷な作業でした。実習後は経理実習を経て、茨城炭業所に転勤となり、念願の労務の仕事に就きました。

現場労務の重要な仕事といえば入坑率の確保です。当時、石炭を掘削するのは機械よりも人間に頼る人海戦術でしたから、人間が入坑しなければ石炭が掘れず、いかに入坑を促進するかが最大の課題でした。その他にも、狭い坑内で無理な姿勢で働く従業員の健康管理はもちろんのこと、命に関わる事故の発生防止の在り方など、大変な腐心の連続です。自宅に社内電話が設置され、外部に出向する場合も移動先を連絡しておかねばならず、気の休まる時間はありませんでした。

1960年代に入ると、エネルギー革命として、「固形エネルギーから流体エネルギーへの転換」、いわゆる「石炭から石油時代」に突入します。石炭の需要はどんどん減少し、閉山の陰りが見え始めると、離職希望者が出てきて、それを食い止めることに神経をすり減らしました。最後の閉山となってからは、職業安定所の支援を受けて再就職対策に奔走しました。

炭鉱の全盛時代には、北茨城市の人口の5人に1人は常磐炭鉱の家族と言われていたことを記憶しています。この地域の人々の暮らしは炭鉱と共にあり、華やかな時代があった一方、終わりも体験しました。共に働いた従業員たちが妻子ともども、まちを去っていく姿には、かなりのさびしさを感じたものです。

閉山後は常磐炭鉱とマックスとの合併会社を立ち上げ働きました。現在は、高齢・障害・求職者雇用支援機構茨城支部で高齢者雇用アドバイザーをしています。長年、労務畑を歩んできて考えることは、人間は情熱が大事であること。本気になって仕事をすれば相手にも理解され、やがて信頼関係が生まれるということです。炭鉱で実に多くの人に会いました。そのときの経験が今も生きております。



### プロフィール：

昭和8年福島県生まれ。中央大法科卒。同33年に常磐炭鉱に入社し、同35年から茨城炭業所に移る。同46年、神ノ山坑閉山により翌年から常磐マックス取締役工場長、同代表取締役を歴任。退職後、翔洋学園高等学校理事長を歴任。

## 北茨城の好きなところ

中郷第一小学校五年  
小室 奏音



私は北茨城が好きです。北茨城は、世界遺産があるような有名な場所ではありませんが、いいところがたくさんあります。

まず北茨城は、海や山など美しい自然に囲まれたところです。小さいころは、広い公園を思い切りかけまわったり、どんぐりや落ち葉を拾ったりしてよく遊びました。私は、北茨城のこの自然で育ちました。最近では、テレビで環境破壊や地球温暖化についてのニュースを目にすることも多くなりました。そういうニュースを見るたび、建物も多くなって便利にはなっただけ、私の大切な北茨城の自然はいつまでも残したいと考えます。将来生まれてくる自分の子どもにも、今の自然豊かな北茨城を見せてあげたいです。そのためにも、ごみ拾いなど自分ができることを進んで行っていききたいと思います。

また、北茨城にはおいしい食べ物がたくさんあります。北茨城でとれるお米は、食感も味も良く、とても食べやすいです。あんこうも有名です。あんこうなべも、とてもかおりが良くて、たまたなく好きです。野菜もたくさんとれます。北茨城の食材をたくさん食べて、地産地消を心がけていききたいと思います。

次は、人物や建物です。人物では、「しゃぼん玉」や「七つの子」で有名な作詞家の野口雨情さんがいます。雨情さんの生家を訪れた際には、雨情さんの詩に様々な意味や気持ちが込められていることを知りました。建物では、特に花園神社が好きです。花園神社の春のしゃくなげや秋の紅葉は、とても美しいです。

東日本大しんさいの津波のひ害にあった建物もたくさんありましたが、北茨城市民の努力で少しずつもと通りになりました。きれいになった建物を見ると、たくさんの人たちの北茨城への愛情が伝わってきてとてもうれしくなります。

私は、北茨城に今後どうなってほしいか考えてみました。やはり、この美しい自然がこれからも守られ続けてほしいと思います。そして、北茨城が茨城県だけでなく、他県からも知られるみ力的な場所になってほしいです。私は、大好きな北茨城をもっとアピールできるようにいっぱい勉強して、その良さをこれから出会うたくさんの人たちに伝えていく一人になりたいです。

## 大好きな北茨城

関本中学校二年  
鈴木 ひより



私は、私の住んでいるこの北茨城市で、好きなところがたくさんあります。

一つ目は、とても自然が豊かだということです。この多くの自然のおかげで、青く輝いている海、季節ごとにさまざまな姿を見せる山など美しい景色を見ることができます。身近にあるものだったので、じっくり見ることは今までありませんでしたが、どこにでもこの豊かな自然があるものではないと気づきました。そして、改めてこの自然はこの町の宝であると感じました。今、地球温暖化が進んでいるのは、都市からの二酸化炭素が原因であるとよく聞きます。都市は、木を切り、その場所に建物を次々に増やしていきます。経済が発展し、外国とも良い関係を築いていくのはとても良いことだと思います。しかし、これ以上地球温暖化の影響を受けないためにも、北茨城市のような緑豊かな地域を残し、自然を大切にすること、一つの対策であると思います。私は、この自然豊かな北茨城市が好きです。

二つ目は、私が毎日通う学校です。全校生徒の人数はとても少ないですが、一年生から三年生まで皆仲が良く、協力し合い毎日楽しく過ごしています。私たちの学校は、平成二十八年四月から小中一貫校としてスタートします。これからは小学生とも過ごすので、私たち中学生がリーダーとして下級生を引っ張っていき、今以上に明るく素晴らしい、北茨城で一番元気な学校にしていきたいです。私は、この学校がある北茨城市が好きです。

最後に、北茨城市で一番好きな場所は、私の家です。私の家には、大好きな父、母、祖父、祖母、そして妹がいます。父は毎日、私たちのために一生懸命、働いてくれている一家の大黒柱です。母も、毎日働いてくれていて、私たちのことを第一に考えてくれています。祖父と祖母は、畑でおいしい野菜を作ってくれたり、両親が忙しいので、私たちの世話もしてくれたりしています。そして、私の妹は、年が離れていますが、私にとって元気を与えてくれる太陽のような、欠かすことのできない存在です。私に、毎日笑顔を与えてくれる、この家、家族が大好きです。

これらの三つは、どれも北茨城市にしかありません。今は、市内の人口もだんだん減ってきてはいますが、皆が元気で明るい町であることには変わらないと思います。これから十年後も二十年後も元気で明るい北茨城市であり、さらにもっと活気があって、老若男女がずっと笑顔で過ごすことができる北茨城市であってほしいです。私は、北茨城市について知らないことが数多くあります。これからもこの北茨城市の魅力を再発見していきたいです。

私の故郷は、北茨城市です。

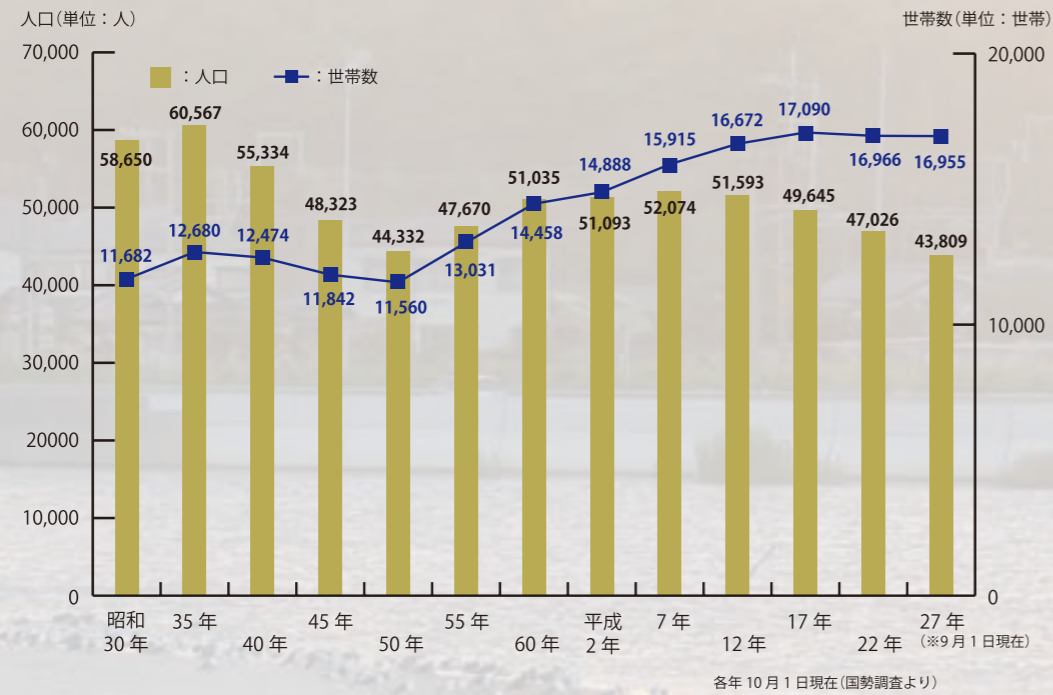
私は、北茨城市が大好きです。

# 資料編

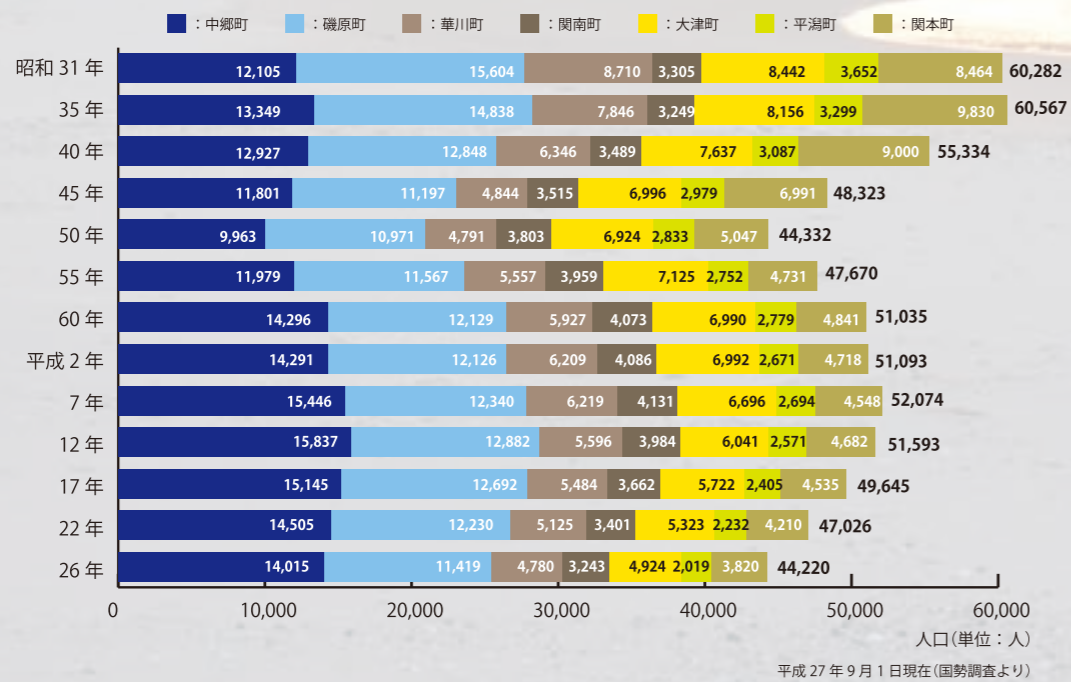
DATA OF KITAIBARAKI

## 人口・世帯数

■人口・世帯数の推移



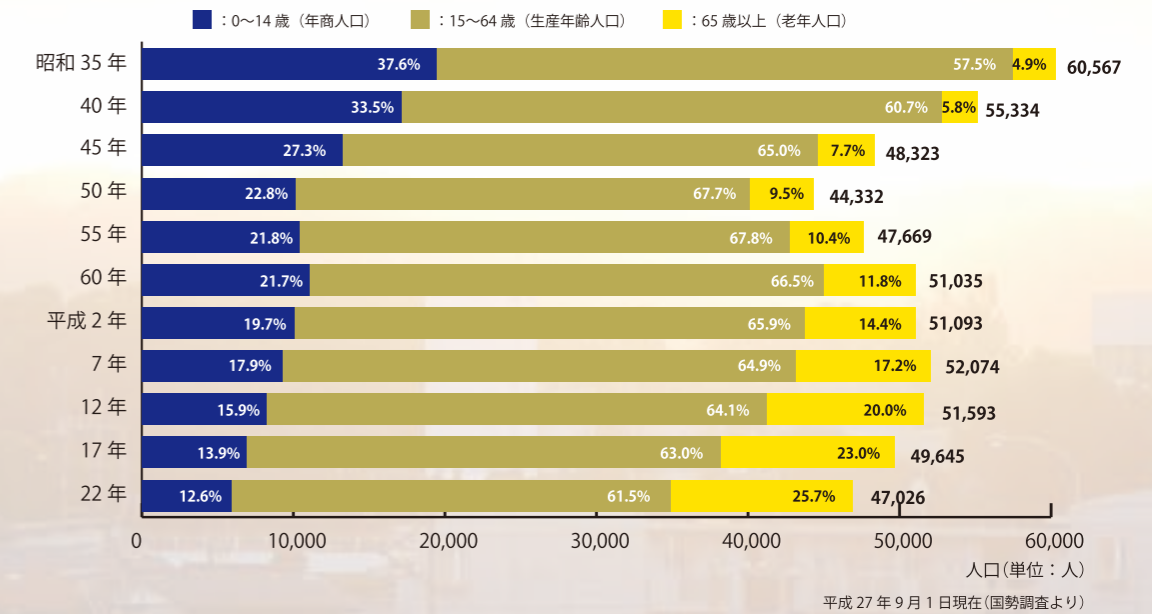
■町別人口の推移



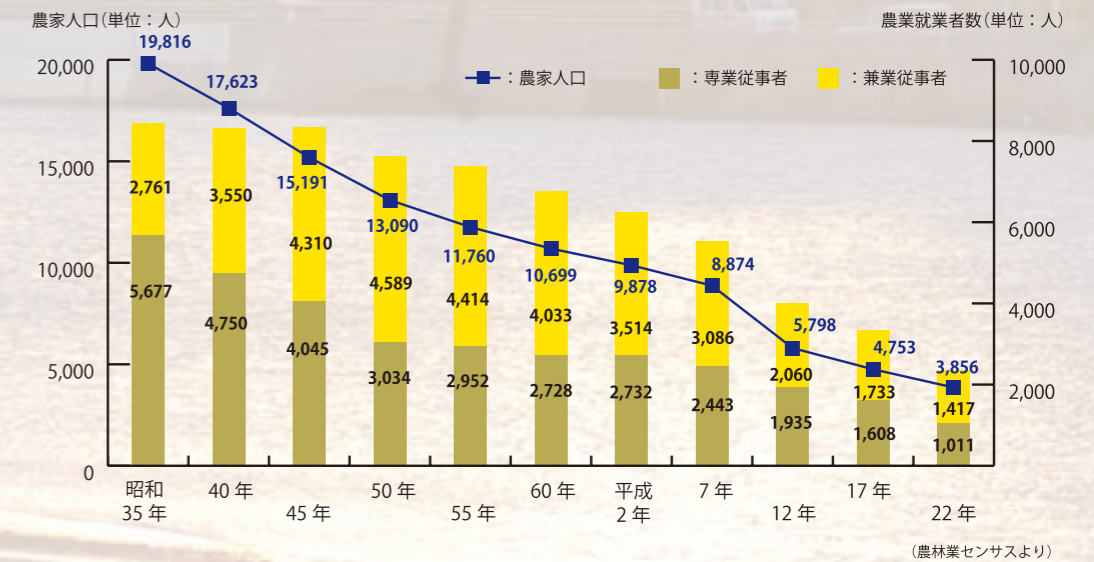
## 人口・世帯数

## 農業

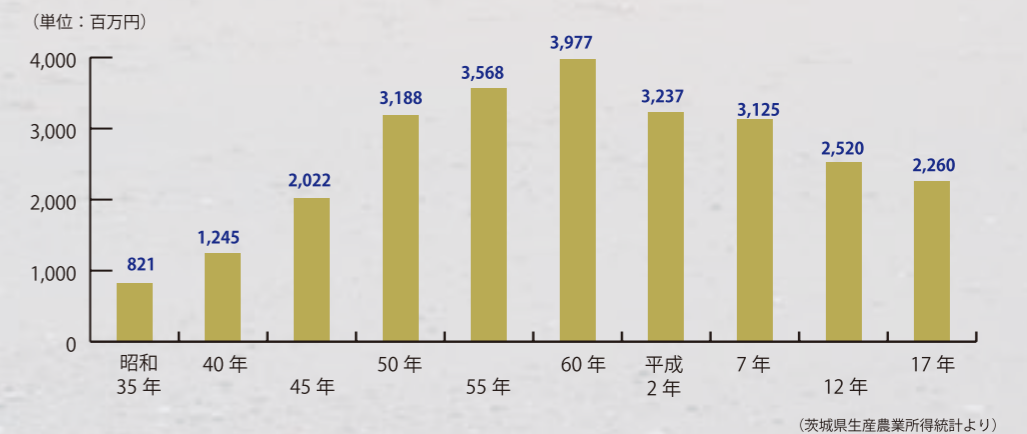
■年齢別人口の推移



■農家人口と農業就業者



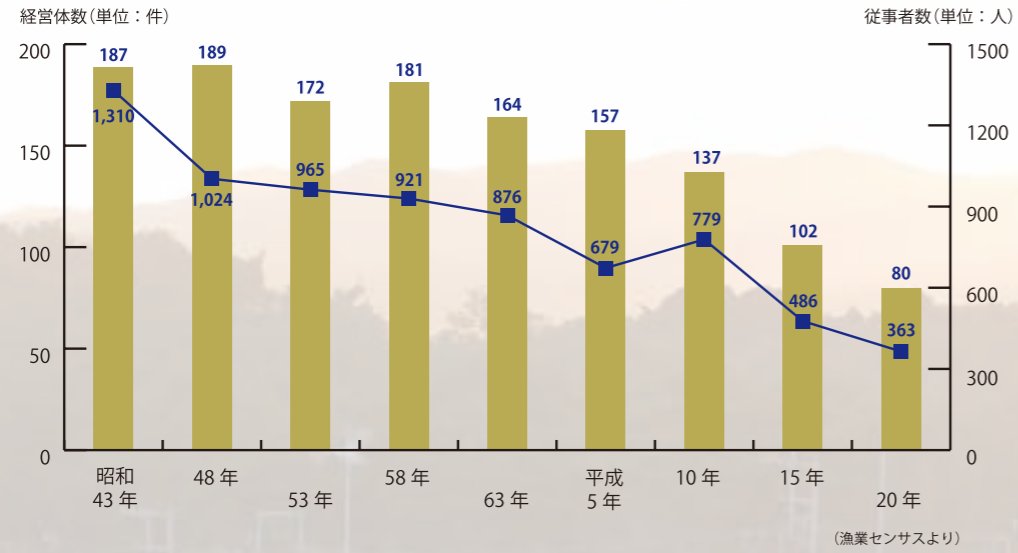
■農業産出額の推移



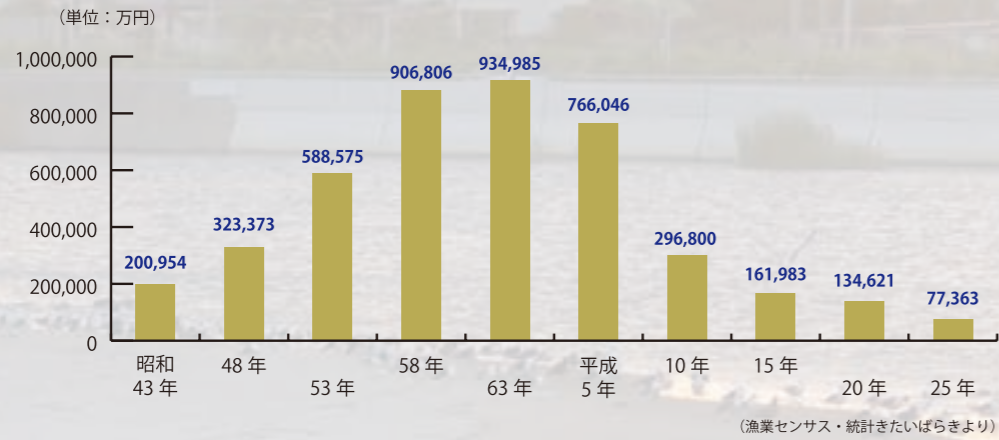


# 漁業

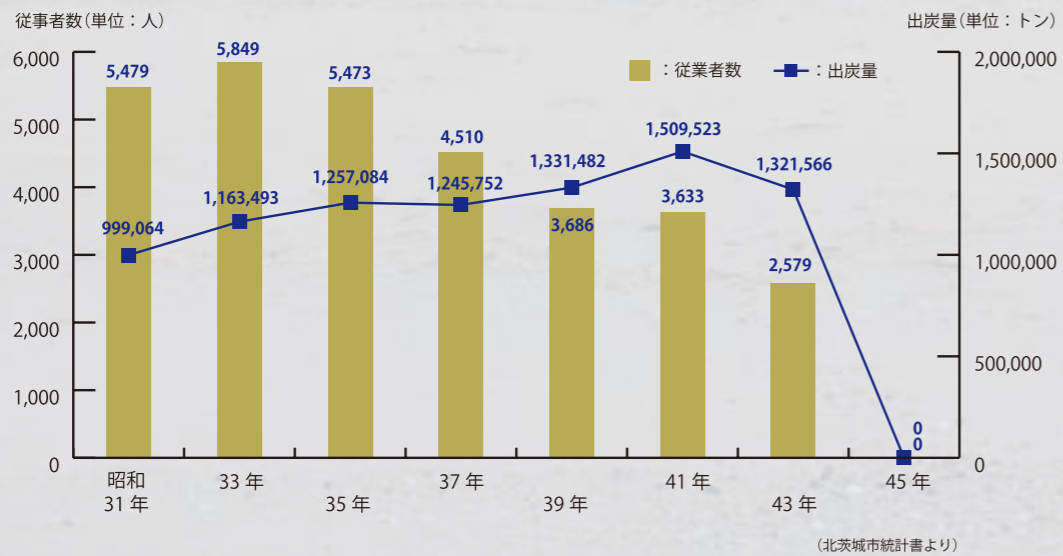
■経営体数・従業者数の推移



■漁獲高の推移



■従業者数・出炭量の推移



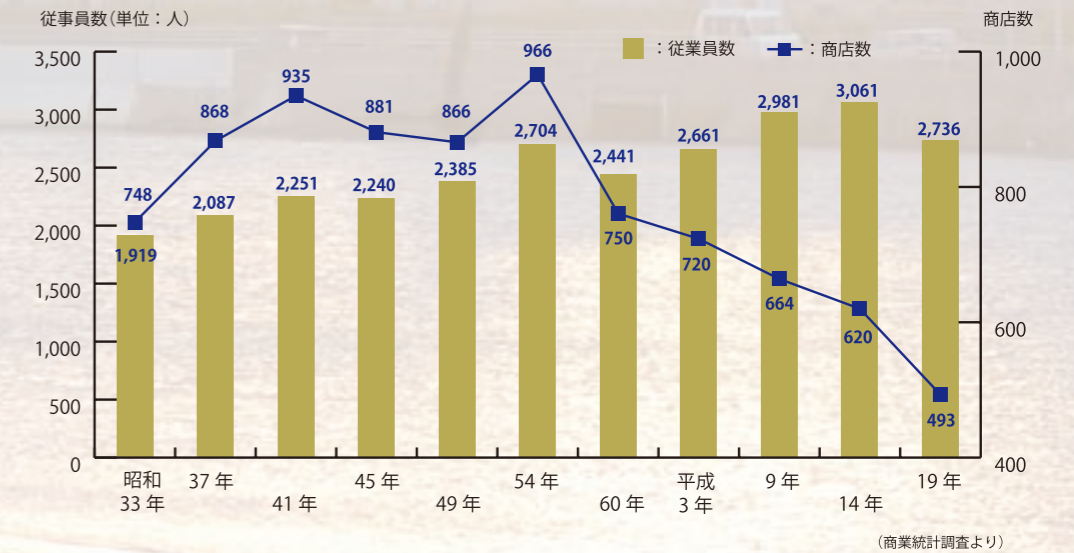
# 鉱工業

# 工業

■従業者数・製造品出荷額の推移

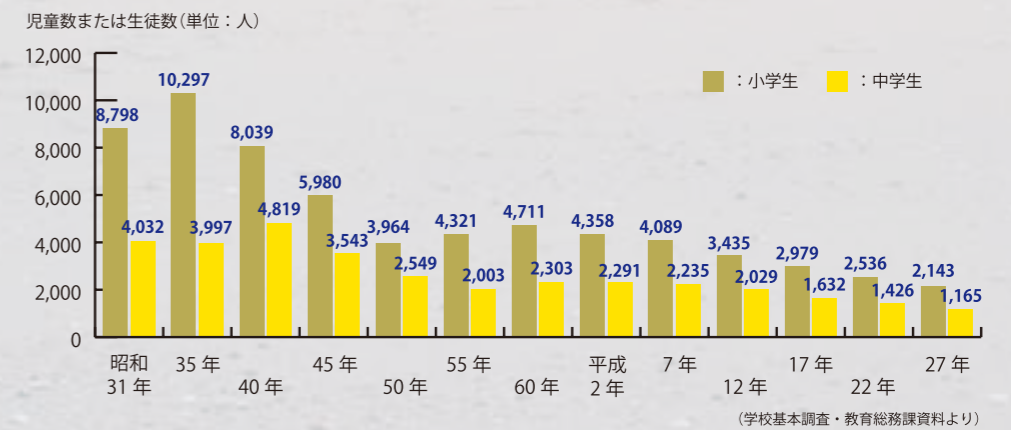


■商店数・従業員数の推移



# 商業

■児童数・生徒数の推移



# 教育

歴代市長・副市長・収入役

■市長

代位	氏名	就任年月日	退任年月日
初代	片 寄 富 七	S31. 5. 5	S35. 5. 4
2	片 寄 富 七	S35. 5. 5	S39. 5. 4
3	豊 田 實	S39. 5. 5	S43. 5. 4
4	豊 田 實	S43. 5. 5	S47. 5. 4
5	豊 田 實	S47. 5. 5	S50. 4.18
6	柴 田 章	S50. 6. 7	S54. 6. 6
7	柴 田 章	S54. 6. 7	S58. 6. 6
8	柴 田 章	S58. 6. 7	S61.10.29
9	松 崎 龍 夫	S61.12.14	H 2.12.13

■副市長（平成19年3月31日までは助役）

代位	氏名	就任年月日	退任年月日
初代	大 塚 軍 司	S31. 6.29	S35. 6.28
初代	赤 津 佐 光	S31. 6.29	S 35.6.28
2	大 塚 軍 司	S35. 7. 1	S39. 6.30
3	丹 孝 次 郎	S39. 8. 1	S43. 7.31
4	松 崎 元 広	S43. 9. 1	S47. 8.31
5	松 崎 元 広	S47. 9.28	S51. 9.27
6	松 崎 龍 夫	S51. 9.28	S55. 9.27
7	松 崎 龍 夫	S55. 9.28	S59. 9.20
8	松 崎 龍 夫	S59. 9.21	S60.12.10
9	清 水 充 雄	S61. 3.19	S62. 8.31

■収入役

代位	氏名	就任年月日	退任年月日
初代	滑 川 義 彦	S31. 6. 9	S35. 6.28
2	滑 川 義 彦	S35. 7. 1	S39. 6.30
3	松 崎 元 広	S39. 8. 1	S43. 7.31
4	宇 佐 美 正 昭	S43. 9. 1	S47. 8.31
5	渡 辺 政 則	S47. 9.28	S51. 9.27
6	渡 辺 政 則	S51. 9.28	S55. 9.27
7	渡 辺 政 則	S55. 9.28	S57. 8. 5

代位	氏名	就任年月日	退任年月日
10	豊 田 稔	H 2.12.14	H 6.12.13
11	豊 田 稔	H 6.12.14	H 7. 5.21
12	村 田 省 吾	H 7. 6.18	H11. 6.17
13	村 田 省 吾	H11. 6.18	H15. 6.17
14	村 田 省 吾	H15. 6.18	H19. 6.17
15	豊 田 稔	H19. 6.18	H23. 6.17
16	豊 田 稔	H23. 6.18	H27. 6.17
17	豊 田 稔	H27. 6.18	現職

代位	氏名	就任年月日	退任年月日
10	鐵 幹 男	S62. 9.28	H 3. 9.27
11	岡 部 良 一	H 3. 9.28	H 7. 9.27
12	石 川 幸 夫	H 7.10. 1	H10. 3.31
13	橋 本 武 次	H10. 4. 1	H12. 3.31
14	神 永 日 出 雄	H12. 4. 1	H14. 3.31
15	神 長 俊 一	H14. 4. 1	H19. 6.17
（平成19年6月18日から平成21年2月28日まで空席）			
16	石 田 奈 緒 子	H21. 3. 1	H25. 2.28
17	石 田 奈 緒 子	H25. 3. 1	現職

代位	氏名	就任年月日	退任年月日
8	渡 辺 積 司	S58. 6.30	S62. 6.29
9	中 川 淑	S62. 9.28	H 3. 9.27
10	野 口 通	H 3. 9.28	H 7. 9.27
11	岡 部 良 一	H 7. 9.28	H11. 9.27
12	神 長 俊 一	H11.10. 1	H14. 3.31
13	山 縣 清 市	H14. 4. 1	H18. 3.31
（平成18年4月1日より空席）（平成19年4月1日より廃止）			



**片 寄 富 七 氏**（明治33年7月19日生～昭和57年9月20日没）  
 贈呈日 昭和43年6月24日  
 昭和26年4月磯原町第23代町長に就任し、県立磯原高等学校の創設を計画、同28年これを実現した。同30年3月磯原町、華川村の町村合併、翌31年3月31日磯原町、大津町、平潟町、関南町、関本村、南中郷村の6カ町村を合併し、北茨城市制を施行した。昭和31年5月北茨城市初代市長に就任し、2期8年間市長を務めた。この間、水沼ダムの建設、小中学校の増改築、水沼診療所の開設、さらに火葬場、し尿処理場、塵芥処理場、市立病院等を建設し、今日の北茨城市の基盤を築かれた。



**豊 田 實 氏**（明治42年2月28日生～昭和50年4月18日没）  
 贈呈日 昭和50年4月30日  
 昭和39年4月第3代北茨城市長に就任し、3期11年間市長を務めた。新工業都市への街づくりを決断し、就任後直ちに、磯原工業団地造成工事に着手、引き続き磯原B工業団地造成事業も完成させた。民間の工業団地造成事業にも力を注ぎ、その規模は、167ヘクタールに達し新工業都市の基礎を築かれた。一方、県立北茨城高等学校の開設、上水道及び工業用水道の浄水場建設、住宅団地造成、北茨城市消防署を発足させる等市民生活の安定に尽力された。

歴代議長・副議長

■議長

代位	氏名	就任年月日	退任年月日
初代	村 田 弥 一 郎	S31. 3.31	S32. 3.30
2	鈴 木 金 太 郎	S32. 4. 5	S34. 4.16
3	村 田 弥 一 郎	S34. 4.16	S36. 3.30
4	水 谷 甲 次 郎	S36. 4. 7	S38. 4. 5
5	村 田 弥 一 郎	S38. 4. 5	S40. 3.30
6	花 園 正 記	S40. 4. 7	S42. 3.20
7	花 園 正 記	S42. 3.20	S44. 3.30
8	柴 田 章	S44. 4.15	S46. 3.18
9	本 田 博	S46. 3.18	S48. 3.30
10	長 瀬 正 一 郎	S48. 4.17	S50. 3.25
11	鈴 木 直	S50. 3.25	S52. 3.30
12	今 井 廣	S52. 4.13	S54. 3.23
13	今 井 廣	S54. 3.23	S56. 3.30
14	今 井 廣	S56. 4. 7	S58. 3.23
15	村 田 素 雄	S58. 3.23	S60. 3.30
16	村 田 素 雄	S60. 4. 5	S62. 6.22
17	松 川 寿 郎	S62. 6.22	H元. 3.30
18	芳 賀 俊 夫	H元. 4. 6	H 3. 3.25
19	松 川 寿 郎	H 3. 3.25	H 5. 3.30
20	大 平 博 之	H 5. 4. 6	H 7. 6.10
21	小 林 政 弘	H 7. 6.29	H 9. 3.30
22	鈴 木 恒 夫	H 9. 4. 7	H11. 3.19
23	松 本 隆 雄	H11. 3.19	H13. 3.30
24	中 村 良 一	H13. 4. 5	H15. 3.19
25	古 茂 田 昇	H15. 3.19	H17. 3.30
26	豊 田 海 洋	H17. 4. 6	H19. 3.23
27	志 賀 秀 之	H19. 3.23	H21. 3.30
28	志 賀 秀 之	H21. 4. 6	H22.11.19
29	村 田 仁 人	H22.11.29	H23. 6.27
30	村 田 洋 文	H23. 6.27	H25. 3.30
31	鈴 木 和 栄	H25. 4. 5	在任中

■副議長

代位	氏名	就任年月日	退任年月日
初代	松 本 勝 太 郎	S31. 3.31	S32. 3.30
2	鈴 木 雅 盛	S32. 4. 5	S34. 4.16
3	水 谷 甲 次 郎	S34. 4.16	S36. 3.30
4	山 形 兼 吉	S36. 4. 7	S38. 4. 5
5	花 園 正 記	S38. 4. 5	S40. 3.30
6	鈴 木 竹 雄	S40. 4. 7	S42. 3.20
7	鈴 木 竹 雄	S42. 3.20	S44. 3.30
8	下 村 哲 雄	S44. 4.15	S46. 3.18
9	今 井 廣	S46. 3.18	S48. 3.30
10	宮 崎 諒	S48. 4.17	S50. 3.25
11	大 友 賢 次	S50. 3.25	S52. 3.30
12	杉 目 時 雄	S52. 4.13	S54. 3.23
13	小 野 寺 宦	S54. 3.23	S56. 3.20
14	村 田 素 雄	S56. 4. 7	S58. 3.23
15	小 林 政 弘	S58. 3.23	S60. 3.30
16	芳 賀 俊 夫	S60. 4. 5	S62. 3.24
17	鳥 居 塚 文 一	S62.3.24	H元. 3.30
18	大 和 田 護	H元. 4. 6	H 3. 3.25
19	古 茂 田 昇	H 3. 3.25	H 5. 3.30
20	松 本 隆 雄	H 5. 4. 6	H 7. 6.29
21	和 田 恒 喜	H 7. 6.29	H 9. 3.30
22	滝 一 司	H 9. 4. 7	H11. 3.19
23	滑 川 光 潤	H11. 3.19	H13. 3.30
24	豊 田 海 洋	H13. 4. 5	H15. 3.19
25	鈴 木 信 男	H15. 3.19	H17. 3.30
26	村 田 洋 文	H17. 4. 6	H19. 3.23
27	村 田 仁 人	H19. 3.23	H21. 3.30
28	村 田 仁 人	H21. 4. 6	H22.11.29
29	緑 川 貞 幹	H22.11.29	H25. 3.30
30	鈴 木 啓 一	H25. 4. 5	H27. 7.22
31	豊 田 海 洋	H27. 7.22	在任中



**柴 田 章 氏**（大正6年7月30日生～昭和61年10月29日没）  
 贈呈日 昭和61年11月7日  
 昭和50年6月第6代北茨城市長に就任し、3期11年間市長を務めた。この間、鉱害復旧事業、中郷工業団地造成事業に着手し、産業構造の近代化に努め、新市街地都市基盤整備のため、磯原駅西区画整備事業に着手した。歴史民俗資料館や各地区に公民館を建設し、市民にコミュニティの場を提供する一方、市民体育館野球場、サッカー・ラグビー場を建設し、スポーツの振興にも尽力された。



**野 口 雨 情 氏**（明治15年5月29日生～昭和20年1月27日没）  
 贈呈日 平成3年12月6日  
 茨城県多賀郡北中郷村磯原（現、北茨城市磯原町磯原）に生まれ、本名は英吉といい64歳の生涯中、数多くの作品、評論等文学的な価値の高いものを残された。作品は独特の感性を持ち、平明、簡潔な言葉でありのままの純真、素朴な人情や自然の姿を愛深く詩情豊かにうたい上げている。主な作品は、シャボン玉、黄金むし、紅屋の娘、兎のダンス、雨降りお月さん、あの町この町、証城寺の狸ばやし、船頭小唄、波浮の港、十五夜お月さん、七つの子等々。

北茨城市制60周年記念誌

# 北茨城市 60年の軌跡

そして未来へ

平成28年3月発行

---

発行 北茨城市  
〒319-1592 北茨城市磯原町磯原1630  
TEL.0293-43-1111 (代)  
<http://www.city.kitaibaraki.lg.jp/>

制作 茨城新聞社